



2011年 秋

ミシガン大学  
国際研究所

日本研究センター



目次

所長挨拶 2

総編集長より 3

ミシガン大学美術館 4

仁木賢司学芸司書、引退 5

ポスト「美しい国日本」：ロボット、瓦礫、放射能 6

アジア図書館の最新情報 9

教員・卒業生・フレンドによる新著 10

お知らせ 11

教員短信 12

トヨタ招聘客員教授の最新情報 12

芸術の力の再考 13

学生・卒業生短信 14

これまでの催し物 16

センター催し物 17

2011年秋季・2012年冬季カレンダー 17

教員研究助成金 18

学

# 所長挨拶



私たちがキャンパスに戻る今秋、東北地方太平洋沖地震と福島原子力発電所事故からちょうど6ヶ月が経ちました。去る3月の惨事はまだ記憶に新しく、被災された多くの皆様には心よりお見舞い申し上げます。

日本北東部の地震活動は今もなお継続し、食糧サプライチェーンの放射能汚染への懸念も現在も継続中です。私は、今夏の東京滞在中に、多くのことがすでに正常に戻っていると同時に震災の爪痕とその余波が至るところに顕在していることに衝撃を受けました。

『伝書』の今回は、日本国政府が震災の前後に犯した数多くの過ちに関するジェニファー・ロバートソン教授(人類学・美術史学)によるエッセイを掲載しています。さらに、吉浜美恵子教授(社会福祉学)が、12月にヌーン・レクチャー・シリーズの一環として、日本の社会文化的な前後関係が震災中および震災後の女性のもろさに影響している様相について講義を行います。

今秋には、ハイデルベルグ大学東アジア研究センターのメラニー・トレーデ教授(美術史学)をトヨタ招聘客員教授として新しく歓迎します。トレーデ教授は、2011～2012年度のみシガン大学滞在中に、日本の絵巻における神話の政治的および絵画的な操作に関する調査を実施します。トレーデ教授が滞在中に参加する活動の一つには、歴史学部の殿村ひとみ教授が準備し2011年10月7～9日にシガン大学で開催される「近代初期『中世』:日本の過去の再構築」に関する学会が挙げられます。

前年度には、日本研究センター(以下「当センター」、「CJS」等)の長年の貢献者2名がシガン大学を退職しました。私の前任の所長であったケン・イトウ教授は、2011年冬学期末をもって引退、ハワイ大学で日本文学の教鞭を執ることになりました。シガン大学在任25年であったイトウ教授は、素晴らしい学者、教師、同僚でした。CJSは彼がいなくなり寂しくなります。さらに、日本コレクションの責任者であった仁木賢司学芸司書が2011年度末に退職しました。仁木氏は過去12年間にわたりシガン大学の日本コレクションを率いてきました。同氏の貢献こそアジア図書館が日本国外で最も重要な日本関連資料のコレクションであり続けた理由の一つです。仁木学芸司書がいらないことを心から寂しく思います。

私の所長就任にあたり、当センターを当大学のキャンパスならびに全米の、日本を対象とした学術探求の焦点に育て上げたCJSの歴代の所長に感謝の気持ちを表したいと思います。さらに、各自の学識と献身によって当センターをこれほどまで知的に活発な場所としている同僚の皆様にもお礼を述べます。CJSは、教員、職員、卒業生、在校生、フレンドのサポートなしには機能し得ません。

皆様にとりましてよい年度となりますように。

所長  
ジョナサン・ズウィッカー



# 総編集長より



2011年秋期の二つの新刊書はどちらも日本文学の英訳です。一冊は、ウィリアム・N・リッジウェイの翻訳、あとがき、および年表による夏目漱石の『野分』(Monograph Series 72, viii+120 pp., ISBN 978-1-929280-68-1, ペーパーバック, \$15.00)、もう一冊は、デニス・ウォッシュバーンの翻訳による津島佑子の『笑いオオカミ』(Monograph Series 73, iv + 240 pp., ISBN 978-1-929280-69-8, ペーパーバック, \$20.00)です。

『野分』は、1907年の東京が舞台です。主人公の白井道也は、主義を曲げない硬骨漢の文学者です。彼の主義は時として彼の教職と相容れず、執筆では余裕のある生活を送れずにいたものの、執筆を通して「今日の若者」について厳格な確信をもって大っぴらに言及することができました。この白井の思考に二人の青年が特に関心を示しました。肺結核を患い貧困に給している、本人も物書き志望の高柳(偶然にも白井の元教え子でした)、そして彼の友人である裕福でダンディーな中野です。この三人の生活と考えがありきたりの状況と予期しない状況の両方において合流します。100年前の東京を中心とした舞台、そしてこの3名の登場人物それぞれの関心事は、今日でさえ紛れもなく通用します。

『野分』は、夏目漱石の全作品の中でも、最も楽しめる作品の一つかもしれません。ドナルド・キーンは、『*Dawn to the West* (日本文学史 近代・現代篇)』において、「登場人物(漱石が同情していると見受けられる者でさえ)の描写のアイロニー、ならびに1907年の東京における生活の詳細の鮮明さが、彼の他のより完成度の高い小説に比べてこの作品をいつそう楽しめるものとしている」と記しています。また、アンジェラ・ユーは、『*Chaos and Order*

*in the Works of Natsume Sōseki*(夏目漱石の作品における秩序と混沌)』の中で、「漢学と英文学の伝統に打ち込んだインテリによって執筆された『野分』は、その道徳判断の大胆さ、厳格な知性、特定の文学的かつ道徳的な見解の弁護において、自然派の作品とは一線を画している」と記しています。

ウィリアム・リッジウェイは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校から日本語学で学士号、上智大学からアジア学で修士号、ハワイ大学マノア校から日本文学で博士号を取得しています。彼は『*A Critical Study of the Novels of Natsume Sōseki*(夏目漱石の小説の批判的研究)』の著者でもあり、現在、ハワイ州ホノルル市に在住しています。

『笑いオオカミ』は、2001年大佛次郎賞を受賞し、日本の文化庁のイニシアティブであるJLPP(現代日本文学の翻訳・普及事業)により選出されました。大戦直後の日本を舞台にしたこの作品は、鉄道で全国あちこちを旅する二人の子供の探検を追跡します。以下は作品の最初の部分からの抜粋です。

思いがけず、突然、私も不安になり、プラットフォームに駆けおりたくなった。でも、もう遅い。これから、どうなるんだろう。私の横にいるのは母親ではなく、「みつお」なのだ。この人はだれなんだろう。心細くなって、涙が眼と鼻から溢れ出てきた。「みつお」から顔を隠すために、膝に額をつけ、眼をつむった。その耳もとに、「みつお」がささやきかけてきた。

——ところで、せっかく、ゆきちゃんは男の子になったんだ。だから、呼び名を考えようか。男の子になりたてホヤホヤの「モーグリ」って名前はどうか。ゆきちゃんも知ってるよね、<ジャングル・ブッ

ク>に出てくる人間の子供。ついでに、おれも「アケラ」に名前を変える。ずっと、そう呼ばれてみたかったんだ。かっこいいもんな。

私たちは、この子供たちを通じて戦後日本の恐怖を経験します。全体を通じて散りばめられているのは、連続殺人犯、人を襲い食い殺す野犬の群れ、水中に埋もれたままの地雷に当たり何百名もの乗客と共に沈没する船などに関する新聞記事の切り抜きです。これらは戦争で荒廃した日本の様相を表した説得力ある読み物であり、文学の授業のみならず歴史の授業でも使用できるものです。

津島佑子は、現代日本のフィクション作家、エッセイスト、批評家であり、本名は津島里子です。受賞歴には、1979年野間文芸新人賞、短編集『黙市』での1983年川端康成文学賞、『火の山一山猿記』での1998年谷崎潤一郎賞と野間文芸賞、そして『笑いオオカミ』での2001年大佛次郎賞などが含まれます。

デニス・ウォッシュバーンは、ダートマス大学のジェーン&ラファエル・バーンステイン・アジア学教授です。彼の多数の出版物の中には、『*Studies in Modern Japanese Literature: Essays and Translations in Honor of Edwin McClellan* (日本近代文学研究: エドウィン・マクレランの功績を称える論文・翻訳集)』(アラン・タンスマンとの共編)、大岡昇平著『花影』(翻訳、1998年)、横光利一著『上海』(翻訳、2001年)、大岡昇平著『武蔵野夫人』(翻訳、2004年)など、ミシガン大学日本研究センターから出版された著作も含まれています。

日本研究センター出版会総編集長  
ブルース・ウィロビー

# ミシガン大学美術館

## ミシガン大学美術館ロバート・B・ジェイコブス 東洋美術絵画修復室



ミシガン大学美術館 (UMMA) の頻繁な来館者であれば、東洋の書画、版画の展示が学期ごとに入れ替えられることに気づくことでしょう。その目的は、絹製や紙製の美術品を光が引き起す害から保護し、後世のために保存し続けることにあります。しかし、慎重な取扱いと注意にもかかわらず、作品が年月が経つにつれて損傷した際、または新たにコレクションに加わ

った作品にシミ、虫穴、皺などがあつた際には、作品は修復家クーウェイ・ワンが率いるロバート・B・ジェイコブス東洋美術絵画修復室に送られ、処置を受けます。

ロバート・B・ジェイコブス東洋美術絵画修復室は、紙および絹を使用した東洋書画を専門とする全米でも非常に数少ない修復室の一つです。1987年に設立された修復室は、外部へ修復サービスを提供すると共に、日本、中国、韓国の絵画500点超ならびにUMMAのアジアおよび欧米のコレクションの版画と素描画7,000点超を、必要

に応じて修復を行なっています。修復室はさらに、UMMAにおける教育および研究の重要な一部を成し、学生およびインターンに美術品保存の技術と科学の世界を紹介しています。専門知識に裏付けされた高度な技術を誇る修復室のサービスは、全米中の美術館および個人コレクションに利用されています。

2009年3月、大規模な新館建設と旧館改築ののちにUMMAが再オープンした際、修復室はUMMAの歴史的建築棟、アルムニ・メモリアル・ホール2階に引越しました。スペースも広がった新修復室では、クーウェイ・ワンと修復技術を学ぶインターンが、時には数世紀前の貴重な作品を入念に保存修復する様子を、ガラス越しに観察することができます。ワンは、中国北京の国立故宮博物院の保存訓練プログラムで学んだ後、国立故宮博物院の保存修復室とドイツのマンハイム美術館での勤務を経て、1996年にUMMAに就任しました。

ワンは、技術向上のために、2001年に京都に6週間滞在し著名な保存修復工房で特別研修を受けました。京都では、ワンは

「猿と蜂」、江戸後期(19世紀)、紙本墨画淡彩 軸装、シンシナティ美術館W・J・ペイアー寄贈、1906.7(修復前)



日本絵画の特殊保存修復技術のみならず、日本の掛軸および巻物の構造と美意識を研究し、中国様式とは異なる様式の表装方法を学びました。今秋期のUMMAの展示作品については、ワンは、大津絵の掛軸2点を表装し直しました。大津絵は、元は江戸時代(1603~1867年)に現在の滋賀県に当たる地域周辺で制作された一種の民俗絵画です。雷神や武蔵坊弁慶(源義経の怪力の家来)などの俗神や伝説的英雄を題材にした、しばしばユーモラスな画像は、日本国内ならびに欧米のコレクターや美術館によって収集されてきました。ワンは、大津絵については、表装材料として、伝統絵画に一般的に用いられる絹製の生地ではなく手すきの和紙を使用しました。歴史的な絵画の重要な一部である表装を手がけるには、技法と共に各文化の特徴的な趣向と美意識に関する徹底した知識が必要とされます。

ミシガン大学美術館  
アジア美術学芸員  
及部奈津



「長刀弁慶」、江戸時代(18世紀)、紙本墨画淡彩 軸装 ジェイムス・マーシャル・ブラマー記念コレクションのため購入 1964/2.101, UMMA



修復家クーウェイ・ワン、修復中の諸作品の前で。右後ろは修復後の「猿と蜂」



# 仁木賢司学芸司書、引退

[左から:]ヘザー・リトルフィールド、ペギー・ラドバーク、深澤ゆり、仁木賢司、ジェーン・オザニッチ、高田あづみ。



アジア図書館はこの春、日本コレクション責任者の仁木賢司学芸司書がミシガン大学在任12年の後に引退したことにより、重要な転換期を経ました。仁木氏は、1999年に日本コレクションを担当し始め、アジア図書館の2003年から2008年までの移行期中には臨時共同館長を務めました。そして、ミシガン大学の日本関連資料の継続的成長を監督し、米国最大級の日本語文献図書館の実力を維持しました。

ビブリオグラファーとしての従来からの技能への確固たる専心と日本の出版人・書籍販売人に関する知識・経験を体現した仁木氏は、ミシガン大学の日本研究コミュニティにとってかけがえのない貴重な存在でした。同氏は、持ち前の並外れた書誌学上の知識を、参照検索や研究への助言を通じて公共サービスに変換することに成功しました。また、司書のキャリア全体を通じて、首尾一貫して自らの遠大な学識の共有に寛大であり、地位が充分確立した学者かまだ駆け出しの学生かを問わず、研究者の仕事を熱心に援助しました。とりわけ、現代日本文学に対するその熱意は、啓発的で他の者に影響を及ぼしました。

図書館の外においては、仁木氏は、大学内外の日本研究コミュニティの積極的行動の一端を担ってきました。日本研究センターの駆動として、そしてその活動の弛みない援護者として、センターの活動の信頼できる拠り所となり、他の日本研究担当司書の間では、年下の同僚にとっては寛容なメンターであり、同年配の同僚にとっては進んで協力するコラボレーターでした。また、東アジア図書館協議会とその執行委員会、国際交流基金図書館支援プログラム諮問委員会、北米日本研究資料調整協議会にも積極的に参加していました。

日本出身の仁木氏は、1973年に上智大学から哲学で学士号を取得しました。70年代後半に渡米し、セント・ジョーンズ大学でアジア研究を専攻し、同大学では1979年から1983年まで、再び1992年から1999年までの2回にわたり司書を務めました。ミシガン大学アジア図書館赴任で中西部へ移る前の1983年から1999年までの期間には、コロンビア大学のC・V・スター東アジア図書館の日本担当学芸司書を務めました。

仁木氏は、ニューヨークと東京のエネルギーをアン・アーバーに吹き込みました。私は、彼と一緒に通りを歩くと、いつも決まって世界が大きくなったような気持ちになったものです。仁木氏は、司書としてのスキルと同様に、その機知とコスモポリタンの魅力によってもよく知られていました。質の高い食へのこだわりは伝説的で、レシピの共有、ランチへの招待、頻繁な差し入れなどを通じて友人や同僚の生活を豊かにしてくれました。自分の周囲のほぼあらゆるものに関心を示した仁木氏は、図書館内外で非常に人気が高く、その豊かな心得ゆえに座談の名手として認められていました。

アジア図書館ならびに大学図書館は、仁木賢司学芸司書の引退を寂しく思います。私たちは、仁木氏の活発な存在が失われたことをすでに痛感しています。仁木氏が楽しく幸せな引退生活を送れるよう祈ります。

アジア図書館  
元公共サービス担当司書  
ブライアン・ヴィヴィエール



(左から右、上から下): 仁木学芸司書、数多くの「引退エプロン」の一つを受け取る。マーク・ウエスト、仁木賢司、阿部マカス・ノーネス。仁木賢司、ロジャー・ハケット、ブルース・ウィロビー。仁木賢司とブライアン・ヴィヴィエール。仁木賢司とマイケル・フェターズ。ケン・イトウ、仁木賢司、殿村ひとみ。エスベランザ・ラミレス=クリステンセンと仁木賢司。



# ポスト「美しい国日本」：ロボット、瓦礫、放射能

2011年6月28日、東京。ここ日本では、津波に飲み込まれた東北沿岸の映像がテレビ視聴者に苦痛きわまるほど遅い復旧ペースの念を押さずして時が流れることは一時たりともない。毎日毎日、勇気ある生存者を特集するストーリーは、誉れ高い「我慢」、「頑張れ」、または「頑張ろう」といった日本の伝統精神の生きた手本の宝庫としての東北人のステレオタイプを強調している。しかし、メインストリーム・メディアによるこうした価値感の祝福は、国家からの長期的かつ有形的な援助がないことには、不誠実に見受けられる。自然災害中の無私無欲の勇気ある行動は賞賛に値するが、無能で無関心な政府および産業界の役人たちへの独りよがりな対応に辛抱強さを引き合いに出すことは、それこそひどい目に遭わせたうえに侮辱を与えるようなものである。

国家が東北人の頑張れ精神を自らの便益のために吸収し、海外各地の領事館に「がんばれ日本」のテーマのポスターを協賛させたことは、特にとんでもないことに思える。これ以前にこの標語を聞いたのは、北京オリンピックの最中であつた。さらに「Pray for Japan (日本のために祈りを)」と「Save Japan (日本を救おう)」がとりわけ日本国外で人気の高い新しい標語となった。一方、何万人もの被災者は、日本赤十字社や他の非営利組織に誠意をもって寄付された何十億ドルもの資金のほんの端額を受領したにすぎず、約10万人の被災者は今もなお、満足な食事も適切な設備もないまま蒸し暑い体育館の中でダンボールに囲まれた生活を送っている。日本人および外国人の有名人は、取り残された避難者に切に必要とされている娯楽と笑

いを提供している点で尊敬に値するが、自らのスターパワーに訴えて停滞気味な復旧活動のペースに抗議する者は(まだ)いない。有名人によるショーはテレビ放映され、東北から戻った日本人有名人の一部は、東北の人々を見捨てないで、と視聴者に涙ながらに懇願する。

まもなく7月に入ろうとする今、東北沿岸の市町村は依然としてうず高く積まれた有毒な瓦礫の山に埋もれている。相変わらずの党政治にうつつを抜かす、優柔不断なうえにくだらないことで口論している政治家と官僚の中央集権的リーダーシップの病的な欠如のせいである。阪神大震災が防災対策の衝撃的な欠如をあからさまに露呈した1995年以降、何も学ばなかったのか? 「代わりに、複数の災害が東京と大阪を襲ったなら、混乱は1ヶ月以内に片付けられただろう」などといったのっぴきならない批判を知るには、メインストリーム・メディアから目をそらしてインターネットのブログ、特に日本のツイッターに注目しなければならない。

東北の人々は、生活のストレスがこれでもまだ充分でないかのごとく、自らに活を入れ、自分たちの住居を、生活を、1欠片の瓦礫から、シャベル1すくい泥から、一つ一つ再構築し始めなければならなかった。資金繰りのつく人たちは、大型装置を借りて、漁船を海に戻したり、津波でガラクタと化した自動車を積み上げている。そこまで余裕のない人たちは、震災直後の月間に熱心なボランティアの若者たちの援助を受けたが、これらボランティアたちの何百名かは、一部の場合には訓練と防護の欠如から、アスベストや化学ダイオキ

シンに汚染された瓦礫にさらされたり、鋭い破片で負傷したりした。マスメディアで盛んに取り上げられたのは、悪臭を放ち腐りハエがたかる残骸が人々の健康に呈する脅威ではなく、彼らの心温まる勇敢さであつた。無償のボランティアの人数が徐々に減つたため、6月下旬、国家および非営利組織が避難者に対して自分の地元の瓦礫撤回作業の手伝いと引き換えに1日当たり平均60ドルの最低賃金を義捐金および他の資金源から充当し支払うという取決めがなされた。

震災から4ヶ月目が近づきつつある。3ヶ月目には、人々が23,000名という恐ろしい数の生命の喪失に向き合う様に焦点が当てられた。4ヶ月目には、草の根民衆運動の台頭が間違いなくハイライトされるだろう。東北人が、国家の対応を待つことはゴドーを待つように無駄なことだと気づき始めたからである。皮肉なことに『ゴドーを待ちながら』は現在、東京の新国立劇場で上演中である。

他方、南下すると、放射能被曝した福島県の沿岸では、草が根こそぎ引かれ、校庭の土が掘り起こされている。放射能汚染の悪影響を受けやすい年少の子供たちのために屋外を「より安全に」するためのナイーブでむなしい努力である。ホットスポットが気象状況次第で変化する避難地域圏外に住む子供(公立校の学童)のいる世帯には、ガイガー放射能測定器が国家から配布されている。変化し続ける放射線量を測定する中央政府の調整された取組みは、数ヶ所の主要拠点以外には皆無であることから、人体、家畜、ペットの健康への危険度の測定は、自分たちで活動する

2011年6月5日、大津波により壊滅した三角州の都市、陸前高田(宮城県)。著者が同市訪問中に撮影。地元のボランティア・グループが市の周辺の田から瓦礫を取り除いている。田は約1マイル内陸まで達した津波に飲まれ、海水と関連有毒物(燃料、アスベスト、ダイオキシン、その他)による大被害を受けた。

住民ならびに特定非営利活動法人原子力資料情報室(CNIC)関連科学者などの良心的な科学者にかかっている。地域の豊かな野生生物への害についてはほぼひととも言及されず、津波に飲み込まれた宮城県女川町の原因の被害状況については不十分な情報がほんの少し提供されたにすぎない。

東京電力は、炉心溶融(メルトダウン)ならびに自社の破壊された原子炉から放出され続ける放射能の量と種類の真実を操作し、福島およびその周辺の人々をセシウム137とヨウ素131の間に取り残している。でも心配無用、人気ニュース雑誌『AERA』中のレポートによると、「放射能汚染を防ぐには1日2杯の味噌汁が効く」のだから!

私が日本のロボット産業に関して人類学的研究を実施していることから、同僚たちは、なぜ日本のロボットが救助活動や損壊した原子炉の測量に活用されていないのか、と私に聞く。二本足のロボットが放射性廃棄物をモップで掃いているといった彼らが描くイメージは、サイエンス・フィクションのアニメの世界である。現実には、ホンダのアシモと、彼の自転車に乗ったりバイオリンを弾いたりするロボット友だちは、高度なメカニズムとソフトウェア・システムの設計用としては実際のところ非常にもろいプラットフォームなのである。しかし、これは部分的な質問への回答にすぎず、ここで聞かれていない質問は、ではロボットでないのなら、誰が、または何が、福島の致死的なゴミの山を除去しているのか、そして正確な情報以外のあらゆる情



報はどこから漏れているのか? 3月11日の危機に関する洞察の鋭いレポートが日本のブログで広く配信されている『ニューヨーク・タイムズ』紙は、最近、この問題に言及した記事(「Safety Myth' Left Japan Ripe for Nuclear Crisis (安全神話によって熟した原発危機)」6月25日付)を掲載した。この記事は、原発業界が緊急事態対応ロボット用の資金を原発の安全性を促進する広報キャンペーンに転用したことを嘆く日本のロボット工学者の発言を引用している。この説明は好都合ではあるが、誤解を招く可能性があり、また話の一部分にすぎない。

ロボットは、高度で、高価で、大抵の場合たやすく壊れる機械である。めちゃくちゃに損壊した福島の原子炉の腐食する泥のなかでわざわざロボットを壊すリスクをあえて冒す理由がどこにある? したがって、福島の作業員の90%は日雇いの労働者で、その多くは東北出身の年配の男性である。彼らは仲介人のやくざ、または東京、横浜、大阪の安宿(どや)街によるツイッターでの募集を通じて採用された。彼らの人体は、ロボットと比べると、より多用途

(日本の有名なジャストインタイム生産システムにも選択的に活用可能である)であり、はるかに安い。これら請負労働者の恥ずべき扱いは、最初は1979年に、調査報道ジャーナリストの堀江邦夫によって著作『原発ジプシー』の中で暴露された。それから40年後、彼らは今もなお、強力な原発業界から使い捨てとみなされ、放射能自体と同様に便利にも目に見えないものとみなされている。東京電力は秘密裡に操業し、日本のメインストリーム・メディアは点を線で結ぶことには気乗りがしないようだが、上記の情報はどれも秘密などではない。

日本の救助ロボットとサービスロボットの大半がそれぞれの研究所の内部に安全に保管される一方で、米国企業アイロボット(iRobot)は、震災後まもなく、イラクとアフガニスタンで利用されているバックボットとウォーリアーを損壊した原子炉内に配備するよう、日本の自衛隊により福島に招かれたようである。この選択肢が最初に米軍側から自衛隊に提示されたのか否かについては、憶測が飛び交っている。米軍の人道救援活動「トモダチ作戦」は、3月12日に開始された。この作戦は、日本国内



大津波が内陸に運んだ油火災によって全壊した気仙沼(宮城県)の友人宅から唯一無傷で発見された木造の布袋(福神)像と著者(2011年6月5日)。友人とその家族は助かった。

8 の米軍基地の位置づけに関わる交渉の難航状態の緩和に役立った。おそらくは面目を保つためか、それとも日本製ロボットにリアルタイムのメルトダウンにおいて試験する機会から同等に恩恵を受けさせるためか、東北大学と千葉工業大学の共同開発によるコンパクトなトラクターのような救助ロボット「クインス」が6月上旬に福島原子炉で短期的に披露された。

実は、ロボット工学は、請負労働とは異なり、日本では寛大な資金調達がなされている分野である。例えば、JAXA(宇宙航空研究開発機構)は、宇宙の苛酷な(そして放射性のある)環境に耐えるに充分頑丈であり、日本が2020年までに基地建設を計画している月の表面での操行能力を有するロボットの開発予算として、25億ドルを受けている。安部元総理大臣が『美しい国へ』でロボットに依存する「美しい国日本」の未来的構想を明かした2年後、2009年のベストセラー書籍『ロボットが日本を救う』の題名が叫ばれる。戦後の国家が世界の軍需産業に再び加わり、少なくとも一人の日本国政府大臣が、日本のロボット産業の民需用から軍需用へ

の転換に経済の重要な意義があると記録上宣言した。要するに、日本の産業ロボットおよびサービスロボット産業は、十分な資金繰りと収益性を備え、過去2年間の若干の低迷にもかかわらず、数十億ドルもの収益をもたらすと予測されている。

日本の印象的なパーソナルロボットは、3月11日の惨事以来、アイロボット軍団のために影の薄い存在と化しているかもしれないが、暇なわけではない。ホンダのアシモは、避難者の宙ぶらりんな生活の不安な単調さに2、3時間の気晴らしを与える有名人パフォーマーの一角を成している。また、進取的なロボット工学研究者である柴田崇徳は、被災者の間で蔓延している心的外傷後ストレス障害(PTSD)の軽減において、あざらしロボット「パロ」の療法的価値を促進している。しかし、大半の東北人にとっては、日常の作業を手伝ってくれるパーソナルロボットなくして「美しい国日本」はない。

このエッセイの冒頭で「g」で始まる日本語の単語を羅列したが、ここでもう一つ挙げる。「外圧」(通常は外国政府を指す、外部からの圧力)である。東北地方の複合的な

大惨事は、1945年8月の日本を降参に追い込んだ原爆投下以来最大の惨事であると宣言されている。3月11日、外圧の主体はプレート・テクトニクスであった。津波によって大破した東北沿岸の撃破され寸断された都市は、住民が重度の火傷と負傷を被った広島と長崎に準えられている。それとは対照的に、福島で爆発または放射性物質のいずれかまたはその両方により負傷したと知られている作業員の写真は発表されず、彼らの負傷の性質に関する情報も曖昧なままである。さらに、損壊した福島の原子炉から間断なく漏洩する放射能は肉眼では見えないため、そして公式な情報は放射能の最大許容量について曖昧であるため、多くの日本人は、乳幼児を抱えた母親と反原発活動家を顕著な例外とし、電離放射線の長期的危険性に関して衝撃的なまでに無頓着であり無知である。しかるに、味噌汁がいかに放射線病に対して適切な保護を提供できるかという上記の人気雑誌の記事となるわけである。

日本は、二度の原爆投下とその恐るべき余波を経験した唯一の被爆国であるにもかかわらず、原子力を戦後の復興を牽引する時宜に合った手段として進んで受け入れた。経済が繁栄し純金箔巻き寿司が流行った意気盛んであった1980年代、当時の中曽根総理は、日本は「ポスト戦後時代」に入ったと宣言した。この表現は2008年に日本と中国の新しい友好関係を標して繰り返された。2011年3月11日に観測史上最大の地震と場所によっては100フィートを超える津波を引き起こしたプレート・テクトニクスは、日本をまたもや新しい時代に放り込んだ。ポスト災害時代に、である。現在、日本中の原子炉54基の3分の2が停止され、原発の安全神話は福島(そ





# アジア図書館の最新情報

して女川)プラントと共に崩壊した。

7月1日現在、東京電力と東北電力による給電を受けている都県の一般世帯ならびに企業は、電力消費量を1日当たり15%削減する節電を義務づけられている。今夏は昨夏よりも高温多湿になると予測されることから、他の道府県も同じ政策を自主的に採用するよう勧告されている。熱射病患者、または避暑・水分補給戦略に関するテレビ番組が、東北沿岸の増える一方の瓦礫の山、または避難者の慢性ストレスや不透明な将来をめぐると不安と闘うストーリーの繰返し報道に取って替わりつつある。

6月22日、中道左派的な『朝日』新聞は、「日本にとっての前進は過去への回帰によってのみ見出されるのかもしれない」といった見出しの論説を掲載した。論説に彷彿される懐古的で内向的なイメージは、より限られたなかでやりくりする我慢の「伝統」のイメージであり、それが裕福な市民によって実践されるライフスタイルの選択肢であるなら、おそらく高潔な願望であろう。しかし、東北沿岸に住む何百万人もの人々にとっては、3月11日の三重苦の大災害が、前進する術も後退する術も遮断してしまったのである。ある春の午後、ものの30分の間に、外圧が「美しい国日本」を悪夢国に転換したポスト災害時代の日本のイマジネーションは、論説とは逆に、過激で前代未聞のものでなければならない。

ミシガン大学人類学・美術史学教授  
ジェニファー・ロバートソン

アジア図書館からお便りします。仁木賢司の退職以後、私が臨時日本研究司書を務めておりますので、新しい職務の一部として、ここでアジア図書館の日本コレクションのハイライトとリマインダーをお知らせします。

**アジア図書館読書室：**皆さんの多くがすでにご存知の通り、アジア図書館読書室にはミシガン大学のワイヤレス・アクセスを配備したセミナー／スタディー・ルームを設けています。オンライン・サービスの便利さと書籍および定期刊行物への物理的アクセスを兼ね備えたこの部屋は、今や学生のグループ・アクティビティのために非常に人気の高い場所となっています。データ・プロジェクターも要望に応じて利用が可能です。授業のためにこの部屋の利用を希望される教職員の方は、アジア図書館オフィス(734-764-0406)までご連絡ください。

**Eリソース：**日本でのオンライン・リソースの拡充は、Eブックを含め、中国と韓国より後発となりましたが着実に遅れを取り戻しています。アジア図書館の現在利用可能な日本語Eブックの数はまだ限られていますが、「ジャパン・ナレッジ」を通して小学館新編日本古典文学全集のオンライン版が利用できます。2011年7月現在では、34のタイトルが揃っており、その中には『土佐日記』、『方丈記』、『歎異抄』、『紫式部日記』、『平家物語』、『とりかえばや物語』などが含まれています。内容は、現代語訳と注釈を伴い、どちらも検索が可能です。

**日本研究リサーチガイド：**ガイドは、大学図書館の購読ベースのデータベースと無料オンライン・リソースを掲載しています。コレクションに追加すべきリソースに関する意見および提案を歓迎します。(http://guides.lib.umich.edu/japanesestudies)

**開架書庫再整理：**この夏、アジア図書館の開架書庫が再整理されました。その結果、書架は現在、米国議会図書館の分類に従い、北第3書架のAに始まり北第4書架のZに終わる分類番号によって管理されています。書架で必要文献が見つけれない場合には、マウスのクリック1つで本をリクエストできる「Get This」サービスを図書館が提供していることを思い出してください。

アジア図書館  
臨時日本研究司書  
鈴木真理

# 教員・卒業生・フレンドによる新著

『*On Uneven Ground: Miyazawa Kenji and the Making of Place in Modern Japan* (平らでない地面の上に:宮沢賢治と近代日本における地域の創造)』

ホイト・ロング氏(アジア言語文化学部博士課程、2007年)はまもなく、『*On Uneven Ground: Miyazawa Kenji and the Making of Place in Modern Japan*(平らでない地面の上に:宮沢賢治と近代日本における地域の創造)』(Stanford University Press、2012年)を出版します。この著作は、日本の東北地方は岩手県出身の詩人、児童書作家、教育者、科学者であった宮沢賢治(1896~1933年)を1冊を通じて論じた最初の英語での研究書です。宮沢は、今日でこそ近現代文豪の中でも最も愛され認められている人物の一人として傑出していますが、生前はほとんど知られず読まれなかった地方作家に留まりました。ロング氏にとって、この評判そのものの欠如は、20世紀初頭の文学の創作に関するわれわれの理解を地方および首都圏外という2つの観点から方向変換させる出発点の役割を果たしています。創作の歴史はあまりにもしばしば、東京の文学と芸術の見解のみから語られすぎています。しかし、宮沢の語り小説、素人芝居、農民芸術による革新的実験は、首都圏外の文化活動が芸術家や彼自身のようなインテリが急速に変化しつつある社会を理解するうえで首都圏と同様に生き生きとしきわめて重要であったことの証拠です。

『*On Uneven Ground*』は、宮沢が彼の地理的に辺境である位置づけを彼の地元周辺への視線と全国さらにはその先の世界への視線との両方によって戦略的に占有した方法に、特別な関心を示しています。ロング氏は、宮沢の1920年代以降の数点の創作プロジェクトを、「イーハトヴ」と称した架空の文学地域を形成したり、特定種類の科学的知識を現地の方言で書き直したり、農民の特質に根付いた芸術行為の場を設けたりした彼の試みを含め、検証することにより、宮沢のような人物にとって、自分の出身地を実際にそこに暮らす人々にとって有意義な要領にて想像し直し創造し直す努力をすることはどのようなことであったかを、私たちに示しています。しかしそれは、ある意味で、全国の文化の中心地および文明進歩の先端としての東京の決めてかかった独占的支配を、相対視することでもあります。究極的に、宮沢が文学市場に参入しより幅広い大衆の想像力を捉えることにいかに失敗したか、しかし後になりいかに成功したか、についてのストーリーは、それ自体、戦間期から現在までの日本において文学、土着性、場所の観念がいかに交差しあっているかのストーリーとなっています。



『*Hakuhō Sculpture* (白鳳の仏像)』

ドナルド・マッカラム氏(カリフォルニア大学ロサンゼルス校日本美術史学教授、1999~2000年トヨタ招聘客員教授)の新著『*Hakuhō Sculpture* (白鳳の仏像)』(University of Washington Press、2012年1月)は、650年から710年までに作られた金銅製の仏像に関する包括的論考です。この著作は、歴史のおよび宗教的な要因を検討した簡潔な序文の後、中国および朝鮮の彫仏の先例に関する背景的情報に手短かに触れています。主要部分の舞台は、飛鳥時代の仏像(590~650年)に関する要約説明に続く、白鳳文化の仏像の時代区分化に関係するきわめて複雑な歴史編集(修史)に関する徹底的な分析に設定されています。

この著書の主要部分は、白鳳文化の仏像の早期、中期、後期のそれぞれに章を与えています。マッカラム氏の著書は、中国および朝鮮との関係に重点を置く傾向にあるこの題材の大半の研究とは明確に異なり、日本国内の特定の建造像に焦点を当て、それらを当時の彫刻家による持続的な創造的努力の産物とみなしています。この短い白鳳時代の仏像は日本の仏像の歴史全体の中で最も傑出したものであるとの説が、この著書の重要な主張です。その理由から、個別の像ならびにグループの像の分析は、それらを芸術品として扱い、像の形式上および様式上のクオリティを重視しています。

著者による注記: この書籍の研究の一部は、私が2000年にCJSのトヨタ招聘客員教授として滞在中に実施されたものです。客員教授任命が私のアイデアの形成にもたらした素晴らしい機会を感謝しています。



観音菩薩。金銅、白鳳時代、東京国立博物館。



# お知らせ

## 2011～2012年度トヨタ招聘客員教授

CJSは、9月16日金曜日にトヨタ招聘客員教授(TVP)の歓迎レセプションを行いました。客員教授のメラニー・トレーデ氏は、ハイデルベルグ大学東アジア美術史インスティテュート東アジア研究センターの教授です。トレーデ教授は、ハイデルベルグ大学から博士号を取得しました。研究の対象には、多々ある中でも、日本の美術史、絵巻、ビジュアル分野におけるジェンダー問題、政治的図像などが挙げられます。トレーデ教授は秋季には「Visualizing Narratives: A Fresh Look at Japanese Illuminated Handscrolls(語りを視覚化する:日本の啓発的な絵巻の新鮮な見方)」と題するコースを教授します。さらに、冬季にCJSヌーン・レクチャーを行う予定です。



メラニー・トレーデ、2011～2012年トヨタ招聘客員教授

## アジア図書館旅費補助金

ミシガン大学アジア図書館所蔵資料の活用を希望する日本研究者を対象に、旅費、宿泊費、食費、コピー料金を軽減する目的の補助金として、最高700ドルが提供されます。当センターでは申請書を順次審査しています。

アジア図書館は、ゴードン・W・プランゲ文庫コレクションのマイクロフィルム版、ならびに米国で唯一の『東亜同文書院大旅行誌』と『東亜同文書院中国調査旅行報告書』のセット(マイクロフォルム版)を所蔵しています。図書館に関する詳細情報につきましては、<http://www.lib.umich.edu/asia>をご覧ください。または、図書館アシスタント(734)764-0406 までご連絡ください。関心ある研究者の方は、(1) 申請書、(2) 研究内容および所蔵資料の利用の必要性に関する簡略説明書(250語以内)、(3) アクセスを希望する資料のリスト(申請前に図書館のオンライン目録で該当資料が利用可能とされていることを確認してください)、(4) 最新の履歴書、(5) 予算、(6) 旅程案を、当センター宛に提出してください。当センターでは、Eメールによる申請をumcjs@umich.edu で受け付けています。

## 『とびら』

岡まゆみ、近藤純子両講師は、筒井通雄氏(ワシントン大学教授)、ならびにミシガン大学アジア言語文化学部の元講師の江森祥子(ウイスコンシン大学オシュコシュ校)、花井善朗(ウイスコンシン大学オシュコシュ校)、および石川智諸氏との共著により『上級へのとびら』、『きたえよう漢字力』、『教師の手引き』を出版しました。

『とびら』シリーズは、初級レベルの日本語の教科書を終了した学生を対象にしています。同シリーズは今日までに、全世界100校超ならびに全米60校超の大学によって採用されています。

『とびら』の主な目標は、二通りあります。第一の目標は、学生の当初の学習中に構築された文法、語彙、漢字の基礎を固めることです。第二の目標は、四つの(話す、聞く、読む、書く)技能ならびに社会文化的知識を拡張することです。試験のための読解力および一次資料の活用力の開発に、特に重点が置かれています。同シリーズはさらに、日常会話のやり取り、意見の発表、説明、プレゼンテーション、および聴解力の向上のための、コミュニケーション・スキルも重視しています。

日本語の学習における中級から上級への移行期は、上達の鈍化と学生の意欲の喪失が目立つ傾向にある、としばしば指摘されています。『とびら』は、学生の学習意欲を駆り立てながら学生の知的な好奇心を満たすようなコンテンツを提供することを目的としています。この教科書は、学生が中級で取得していなければならない語彙、漢字、文法、および会話表現を網羅すると同時に、最近の社会情勢の展開ならびに伝統文化や歴史に関する日本の豊富なコンテンツを提供することにより、その目的を達成しています。

最後に、『とびら』は、実生活の状況に近づけた自己練習活動を学生に提供する強力な学習ツールを統合しています。これには、「ランゲージ・パートナー・オンライン」と一緒に使用する会話練習教材、オリジナルのビデオによる現代日本の紹介、ウェブサイトからの一次資料を用いる情報調査の宿題などの項目が含まれています。こうした教材を統合することにより、学生は、教科書のページを越えてコンテンツに恵まれた学習環境を享受することができますようになります。



## 教員短信

アジア言語文化学部日本語課の遠藤賢治、望月良浩、津田佐登子、安田昌江の諸講師は全員が、ACTFL OPI(米国外語教育協会の口頭能力測定試験)の試験官として4年間の認定証を取得しました。

ケン・K・イトウ教授(アジア言語文化学、CJS前所長)は、ミシガン大学を退職し、日本文学名誉教授となりました。ハワイ大学の日本文学教授の職に就きました。

阿部マーカス・ノーネス教授(映画研究、アジア言語文化学)は、東アジアの映画の書道に関する著書に取り組んでいます。2011年夏の大半を、復旦大学(上海)の復旦大学新闻传播与媒介化社会研究创新基地と台湾(教育省招待)で過ごしました。また、日本の東映と東邦の映画撮影所でアート・ディレクターたちを対象に調査を行いました。

ジェニファー・ロバートソン教授(人類学、美術史学)は、安倍フェローシップ・プログラム(SSRC)を通じて日本、韓国、およびイタリアで調査を実施中であり、今後も継続していきます。その課題は、「Safety, security, convenience: The political economy of service robots in Japan(安全、セキュリティ、便利:日本のサービスロボットの政治的経済学)」です。ロバートソン教授は最近、書評「Book Review: Hiromi Mizuno, *Science for the Empire: Scientific Nationalism in Modern Japan*(書評ヒロミ・ミズノの『帝国の科学:近代日本における科学的愛国主義』)(Stanford, CA: Stanford U Press, 2009)」(Comparative Studies in Society and History 53(1): 223-225)を出版しました。さらに、論文「Gendering Robots: Posthuman Traditionalism in Japan(ロボットのジェンダー化:日本のポストヒューマン伝統主義)」(『*Recreating Japanese Men*(日本男子の再創造)』Chap.13, pp. 405-426)(Sabine Frühstück and Anne Walthall, eds., Berkeley: University of California Press)も発表しました。8月には、ライデン大学の「Food in Zones of Conflict(紛争地域における食物)」に関する国際会議において「Edible Eugenics in Japan: Vitamins, Blood Tonics and Nation-Building(日本の食べられる優生学:ビタミン、血液強壯剤、そして国づくり)」と題したキーノート講演を行いました。また、秋季美術史フリーア・シンポジウム「Barbarians, Monsters, Hybrids, and Mutants: Asian Inventions of Human 'Others'(野蛮人、怪物、ハイブリッド、突然変異体:アジアの「他の」人の発明)」を取りまとめ、司会を務めました(10月22日)。(ロバートソン教授の活動については、第6ページも参照のこと。)

## トヨタ招聘客員教授の最新情報

T・R・リード氏(ジャーナリスト、作家、1997年TVP)は、この夏に英語と日本語の両方で出版された新著を共著しました。この書籍は、日本では『ニッポン見直す』(小学館)、米国では『Reimagining Japan』(Simon & Schuster)と題されています。リード氏は、3月11日の惨事の後に日本が災害にいかに対応しているかに関する執筆にこの著作の相当部分を割きました。

大貫恵美子氏(Emiko Ohnuki-Tierney)(ウィスコンシン大学人類学ウィリアム・F・ヴィラス教授、1995~1996年度TVP)は、2008年にパリ高等研究所(L'Institut d'Etudes Avancées-Paris)のフェローに選拔され、2010年と2011年に2、3ヶ月間にわたり同研究所に滞在しました。引き続き二つの分野、すなわち食べ物と戦争・暴力に関心を抱いています。『*Radical Egalitarianism: Engaging the Legacy of Stanley J. Tambiah*(過激な平等主義:スタンレー・タンバイアの伝統を引き継ぐ)』(New York: Fordam University Press)に「The Seed of Local Violence in Geopolitics: Tambiah's Theoretical Contribution(地政学における地元の暴力の種:タンバイアの理論的貢献)」を、さらに『*Katô Shûichi et son époque*(加藤周一とその時代)』(CNRS Editions Alpha)に「La culture japonaise de <<l'ici>> et <<maintenant>> de Katô Shûichi dans les concept du temps et de l'espace. Réflexions à partir de l'anthropologie(時間と空間の概念における加藤周一の「ここ」と「今」の日本文化:人類学からの乖離についての熟考)」(pp.79-84)を発表しました。また、『*Kamikaze, Cherry Blossoms and Nationalism*(神風、桜、愛国主義)』と『*Kamikaze Diaries*(神風日記)』はフランス語への翻訳が進んでいます。前者は韓国語とイタリア語ですでに発売され、後者はポーランド語、ロシア語、ポルトガル語への翻訳が完了しています。

ジュリア・アデニー・トーマス氏(ノートルダム大学歴史学准教授、2009~2010年度TVP)は最近、「The Global Environment: Capitalism, Marxism, Fascism and Nature(グローバル環境:資本主義、マルクス主義、ファシズム、そして自然)」と題したコースを教授しました。さらに、環境歴史学に関して二つのエッセイ、すなわち『*Rachel Carson Center Perspectives, Special Issue: Perspectives on the Future of Environmental History*(レイチェル・カーソン・センター見解:特別号:環境史学の将来に関する展望)』(Munich: University of Munich, 2011年)に「From Modernity with Freedom to Sustainability with Decency: Politicizing Passivity(自由を伴う近代性から節操を伴う持続可能性へ:受動性の政治化)」、および、溝口常俊編集の『*The Environmental Histories of Europe and Japan, Oxford-Nagoya Environment Seminar*(欧州および日本の環境史学、オックスフォード名古屋環境セミナー)』(名古屋大学、2011年)に「Japan's 'Natural' History as Resource for the Global Future(世界の将来のリソースとしての日本の「自然」史)」を発表しました。

# 芸術の力の再考

2011年5月9日から30日まで、私は「Re-thinking the Power of Art: Art Education for Social Change in Japan (芸術の力の再考:日本における社会的変化に関わる芸術教育)」コースの一環として、学士課程の学生9名のグループを引率して日本に滞在しました。私たちはクラスとして、2月から日本の文化、言語、サービス学習プログラムに関する会議を開き準備を進めていました。この旅行の目的は、人々の生活とコミュニティを改善するうえで芸術に何ができるかを実際に経験することにあります。10年以上にわたる不況と高齢化により、日本の社会的プログラムは大幅に削減されています。しかし、ミシガン州の姉妹県であり私たちの目的地であった滋賀県では、ギャップを埋めるために市民が立ち上がり、子供たちや障害者が芸術制作を継続できることを徹底するための非営利組織を発足させました。滋賀県での3週間の滞在中、学生たちと私は、人々が自分たちのプログラムを組織し実践する様子、社会的企業家精神の意味し得るところ、支援的な地方政府の恩恵について学びました。

私たちは、旅程の大半にわたり、日本の小さな地方都市、信楽に滞在し、軽度の認知障害または精神障害を持つ人々の住居である「信楽青年寮」に住み込みました。



小学校の図画工作のクラスへの訪問。

私たちは滞在中に多数の住人と知り合いになりました。彼らの多くは日本語を話すことができたものの、私は彼らが何を言っているのか理解できず、通訳することができませんでした。そこで代替的コミュニケーション法を見つけ出したのは学生たちであり、滞在期間を通じて学生たちと住人たちの間には親睦が芽生えました。

私たちは「信楽青年寮」を拠点として、地域コミュニティに繰り出しました。小学校を3校、美術館を3館、それぞれ訪れ、多数のコミュニティ・リーダーたちと話し、大学も2校訪問し、障害を持つ人々の施設4軒で時間を過ごし、地元の芸術家のバーベキュー・パーティーに出席し、信楽町観光ツアーに出かけ、「陶芸の森」の信楽焼き陶芸館の実技講座を受け、山中の滝までハイキングし、茶会に出席しました。さらに私は、嘉田由紀子滋賀県知事に面会しました。嘉田知事は、私たちの旅行の目的に大に関心を示してくれ、A&D(アート&デザイン)実践プログラムについて話し合おうと私を招待してくれたのです。私たちは、芸術とコミュニティのみならず、ダイバーシティ問題や環境問題に至るまで、数多くの課題について話し合いました。嘉田知事は、就任後、芸術を促進することにより滋賀県民の生活の質を向上することを目的とする文化振興課を設立しました。この進歩的な行政政府を目の当たりにするのは素晴らしいことでした。今回の旅行に対しても支援を示してくださったことに心から感謝しています。

こうした行程に組まれた全活動の合間には、さらに数多くの個人的体験がふんだんにあり、学生たちは信楽の人々との絆を感じました。素晴らしいボランティアのグループが私たちのために寛大に時間を割いて



野草の収穫。

くれ、また、滋賀県庁からの交通機関とガイドランスの提供などの援助は、私たちのすべての行動を実現可能にしてくれました。ミシガン大学の国際研究所から実験学習基金(ELF)の補助金、およびエイキンズ国際旅行イニシアティブから資金援助を受けられたことも、非常に幸運でした。こうした支援が学生たちの旅行を可能ならしめました。

この旅行は、疲労が大きかったにしろ、素晴らしいものでした。私が滋賀県庁の公職員と話を始めたのは数年前でしたが、コミュニティ・リーダー、美術館、非営利組織、および滋賀県職員と密接に協力しつつ旅行を取りまとめるのに1年半を要しました。このような旅行をまた執り行うことは今すぐ考えられませんが、一休みした後は、学生たちが日本の異なる側面を経験するために、ミシガン州と滋賀県とのより強力な関係を心に銘じて、また別の旅行を計画することに再び尽力していきます。

美術・デザイン学部教授  
犬塚定志



ミシガン大学の学生のための滋賀大学でのミニ・コース。

# 学生・卒業生短信

エリック・アガナさん(CJS修士号2009年卒)は、2011年夏、カリフォルニア州サンニールを本拠とするバイオテクノロジー企業であるセファイドに常勤の試薬製造化学者として入社しました。

有賀賢一さん(政治学博士課程、2010年卒)は、2011～2012学年度、オハイオ州立大学政治部の講師に就任し、日本の政治学と量的方法論を講義します。

トーマス・バークマンさん(CJS修士号1971年、歴史学博士号1975年卒)は、2011年9月にアジア学ディレクター(1994～2007年)兼アジア学研究教授を務めてきたバッファロー大学から引退しました。8月には、戦争の記憶と和解に関するプロジェクトのために沖縄で調査を実施しました。秋には、シンガポールでバッファロー大学のプログラムを教えました。

シェリー・フェンチェスさん(歴史学博士課程)は、IIEフルブライト・フェローシップを受け、2011年秋、東京大学史料編纂所で博士論文のための調査を行いました。

メガン・ヒルさん(音楽・演劇・舞踊学博士課程)は、国際交流基金の2011～2012学年度博士論文フェローシップを受けました。12ヶ月間、東京に滞在し、浅草の音景に関する博士論文のための調査を実施します。最近、エヴァン・ウェアさんと結婚しました。

アン・ホガーツさん(学士課程1989年卒、CJS修士号1995年卒)は、最近、シエナハイツ大学の大学院長としての初年度を終えました。また、ミシガン州リヴオニアの革新的なチャーター・スクール、ひのきインターナショナル・スクール(<http://www.hinoki-school.org/>)の理事会書記も務めています。同校は、イースタン・ミシガン大学、リヴオニア公立学校、およびひまわり幼稚園の協働により第1学年の生徒に日英両言語のカリキュラムを通じたバ

イリンガル/バイカルチャーのデュアル・イマージョン教育を提供しています。

アンエリス・ルアレンさん(人類学博士号2006年卒)は、カリフォルニア大学サンタバーバーラ校(UCSB)東アジア言語文学部で教鞭を執って4年になります。2010年秋には、Indigenous Women and Feminism: Culture, Activism, Politics(先住民族の女性とフェミニズム:文化、運動、政治)』(University of British Columbia Press)において論文「Beyond Feminism: Indigenous Ainu Women and Narratives of Empowerment in Japan(フェミニズムを超えて:日本におけるアイヌ民族女性とエンパワーメントの語り)」を発表しました。2010年にはさらに、北海道のアイヌ民族派遣団とピュージェット湾全域のアメリカ先住民族コミュニティの間の国際交流の促進に尽力しました。この交流のクライマックスは、2010年度のトライバル・ジャーニーズ(100隻を超える伝統的なカヌーで北西部太平洋沿岸を漕ぐ恒例のカヌー復興祭典)にアイヌ民族が参加したことでした。

ウィリアム・ロンドさん(歴史学博士号2004年)は、オークランド大学史学部で教職に就きました。

ホイット・ロングさん(ALC博士号2007年卒)は、シカゴ大学東アジア言語文化学部の日本文学助教授に任命されました。新著が「教員・卒業生・フレンドによる新著」欄(第10ページ)に特筆されています。

ブリジット・K・ラブさん(人類学博士号2007年卒)は、プロジェクト「Unsustainable Developments: Depopulation, Aging, and Revitalization Pursuits in Rural Japan(持続不可能な開発:日本の地方における人口減少、高齢化、復興運動)」のために国際交流基金の短期研究フェローシップを受けました。

岡垣知子さん(政治学博士号2005年卒)は、ハーバード大学ライシャワー日本研究所の客員研究員を終えて帰国しました。4月以降、獨協大学法学部で国際政治学教授を務めています。

アン・シェリフさん(ALC博士号1991年卒)は、プロジェクト「Getting Back into Print: Post-Disaster Publishing and Literature from 1945(印刷物への復帰:1945年以降の戦後の出版と文学)」のために国際交流基金の短期研究フェローシップを受けました。

ニコラス・A・タイセンさん(比較文学博士号2009年卒)は、アイオワ大学の日本文学助教授に就任しました。

リア・ゾラーさん(CJS修士号2009年卒)は、石川県の穴水町でのJETプログラムの国際交流員(CIR)としての契約を2011年8月に終了しました。そして、石川県金沢市の金沢・加賀蒔絵振興事業協同組合を通して『ディスカバー金沢』(元「金沢倶楽部」)のウェブコンテンツ・マネージャーの職に就きました。

## 2011年4月期卒業生

### CJS修士号

エミリー・カノサ  
アダム・H・レッドフォード  
ジョシュア・E・シュラケット  
ジェニファー・L・ライト

### 文学修士号/JD

ベンジャミン・J・ポッター

### 修士号

エリカ・R・アルパート(人類学)  
田代竜太郎(経済学)

### 博士号

クリスティーナ・S・ヴァシル  
(アジア言語文化学)

## 2011年秋期新入生(およびその出身校)

### CJS修士課程

サラ・E・(バス)・アンダーソン  
(バトラー大学)  
マーク・カラッチオーロ  
(ネバダ大学ラスベガス校)  
フィロメナ・A・(ヘリナ)・マツァー  
ヒルウェイ(バード大学)  
シャーレット・D・ストーナー  
(ミシガン大学)  
隋愛琳(ワシントン大学)  
アラン・チェ(ウェイン州立大学)  
キャスリン・F・ウィーラー  
(デュケイン大学)

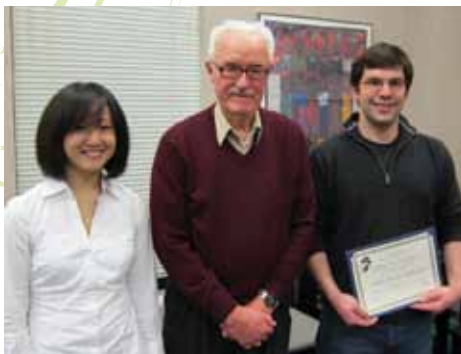
### 博士課程

ポーラ・R・カーティス  
(オハイオ州立大学歴史学)  
ジェフリー・M・ロレンツ  
(スタンフォード大学政治学)  
松坂裕晃(早稲田大学歴史学)  
アレクサンダー・スカイラー  
(コルゲート大学人類学)  
孫イレ(韓国芸術総合学校、ALC)

## 2011年度ウィリアム・P・マルム賞

### 大学院生賞

ケヴィン・P・マルホランド  
(ALC博士課程)  
「The Fantasy of Confession:  
Understanding Shimazaki Tōson's  
Hakai through Slavoj Žižek's Use  
of Lacan's 'Graph of Desire' (スラ  
ヴォイ・ジジェクによるラカンの「欲  
望のグラフ」の利用を通して島崎藤  
村の『破壊』を理解する)」



2011年度ウィリアム・P・マルム賞受賞者とウィリアム・マルム名誉教授

### 大学生賞

マリエ・ヤスダ(LSA学士課程)  
「Memory to Morality: The  
Journey from the Grove to the  
Gate(追憶から道徳観へ:果樹園  
から門までの道程)」

### 学生の奨学金、フェローシップ、補助金

#### 外国語・地域研究(FLAS)日本語 フェローシップ、2011年度夏期

##### 修士フェロー

キャメロン・C・カタルフ(日本研究)  
アンドリュー・S・マスカロ(日本研究)  
メリッサ・D・ヴァン・ウィック  
(日本研究)

##### 学士フェロー

クリストファー・J・クラキオラ(LSA)  
ジェイムズ・A・グリフィス(LSA)

#### 外国語・地域研究(FLAS)日本語フェロ ーシップ、2011~2012年度通年期

サラ・E・アンダーソン(日本研究)  
スカイラー・E・ジョンソン(日本研究)  
グレン・K・ラシュレイ(日本研究)  
リンダ・B・シュルツ  
(保健行動・健康教育学)

#### CJSフェローシップ、夏期

テイラー・J・カゼラ(日本研究)  
コーン・コナント(日本研究)  
ナオコ・フクシマ(比較文学博士課程)  
スカイラー・E・ジョンソン(日本研究)  
ケヴィン・ゲージ(歴史学博士課程)  
長谷川誠(経済学博士課程)  
クリア・M・カウプ(日本研究/法学)  
ノア・S・スミス(経済学博士課程)  
エヴァン・R・E・ウェア  
(音楽理論・作曲学博士課程)

#### CJSフェローシップ、学年度

マーク・カラッチオーロ(日本研究)  
キャメロン・C・カタルフ(日本研究)  
クリア・M・カウプ(日本研究/法学)  
フィロメナ・A・マツァー-ヒルウェイ  
(日本研究)  
キャサリン・R・サージェント(日本研究)  
メリッサ・D・ヴァン・ウィック(日本研究)

## 伊藤国際教育交流財団奨学金

ジョージ・R・ウェント  
(微生物学/日本語学学士課程)

## CJS会議旅費補助金、2010~2011年度

ドリュー・M・フォスター  
(社会学博士課程)  
ハワイ国際社会科学会議  
照山絢子(人類学博士課程)  
米国人類学会・アジア学会会議  
梅田道生(政治学博士課程)  
政治学における形式理論と定量方法  
に関する会議

## 日本語 旅費補助金、2010年度

エミリー・F・カノサ(日本研究)  
オリビア・M・カセッタ(LSA)  
シェイエン・チャン(LSA)  
スカイラー・E・ジョンソン(日本研究学)  
サンド・リー(LSA)  
ハルミ・ムラセ(LSA)  
ダル・チー(LSA)  
キャサリン・R・サージェント(日本研究)  
アレクサンダー・F・ヴァーニー(LSA)  
ジョージ・R・ウェント(LSA)  
ジョアンナ・ウイッジャジャ(産業/  
オペレーション工学修士課程)

## 外部のフェローシップおよび受賞

シェリー・ファンチェス  
(歴史学博士課程)  
フルブライト・フェローシップ  
ラッカム国際研究賞  
長谷川誠(経済学博士課程)  
ラッカム国際研究賞  
メガン・ヒル(音楽民俗学博士課程)  
国際交流基金博士課程フェロー  
シップ  
ノア・S・スミス(経済学博士課程)  
ラッカム国際研究賞

# これまでの催し物

## 日本国憲法は21世紀に適しているか？

過去10年ほどにわたり日本国内で憲法改正の考察が再燃しています。冷戦の終了と20年間の不況により、21世紀における日本の諸制度の生存能力に対する疑念が提起されるようになってきました。政党ならびに学界は新憲法の草稿を提案し、国会は予備審議を開始し、一般公衆の改革支持は上昇基調にあります。重要なことは、これらのイニシアティブは、2、3の改正を行うのではなく、全文の書き直しを目指していることです。日本の政治、社会、宗教、経済、および法律の具現化における憲法の基本的役割を鑑みると、改正はよいアイデアなのでしょうか？そして仮にそれがよいアイデアであったとしても、変更の可能性およびその影響はどのようなものになるのでしょうか？

2011年4月15日にミシガン・リーグにおいて主催された学会では、専門領域が多々に異なる学者が一同に集まり、日本国憲法の歴史的影響と将来の見通しを検証しました。プレゼンテーションは、憲法の行政的および法的な解釈の進化、二院制の立法機関が日本の外交政策を制限する様、憲法改革に関する一般公衆の意見ならびに政治哲学の移り変わり、日本の憲法の国家間比較を探索しました。質疑応答では、合計40名のパネリストと参加者が憲法改正の必要性と見直しについて活発な議論を繰り広げました。パネリストは、予測可能な将来における憲法改正は可能性が低いとおおむね考えていますが、憲法の解釈の変化は、国家が直面する差し迫る難題に対処するに十分な柔軟性を憲法の本文に与えることになるという点で幅広い意見の一致が見られました。

この学会に関する詳細情報は、実際のプレゼンテーションを含め、以下のウェブサイトから入手可能です。この学会は、日本研究センター、国際研究所、人文学研究所、およびラッカム大学院の寛大な支援によって実現しました。

[http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/conferencesworkshops/isthejapaneseconstitutionsuitableforthe21stcentury\\_ci](http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/conferencesworkshops/isthejapaneseconstitutionsuitableforthe21stcentury_ci)

政治学助教授

ケネス・盛・マッケルウェイン

## ミシガン大学の学生、年次スピーチコンテストで最上位2賞を獲得

3月26日、2011年度ミシガン州日本語スピーチコンテストにおいて、ミシガン大学の学生2名が第1位と第2位を受賞しました。大学院生の劉蘭個川(リュウ・ランコセン)は、「和製漢語—中国語を変えた日本語 (Japanese Words that Reshaped the Chinese Language: Wasei-Kango)」と題したスピーチで優勝の栄誉に輝き、賞品として日本往復航空券を授与されました。ユリヤ・ハハレヴァのスピーチ「故郷も国境も越える夢 (A Dream Transcending Village and Border)」は第2位を受賞し、賞品としてアップルのアイポッドとギフト券を授与されました。このスピーチコンテストは、在デトロイト日本国総領事館、デトロイト日本商工会、

劉蘭個川とユリヤ・ハハレヴァ



ALC日本語講師とスピーチコンテスト入賞者一同。(左から:近藤純子、望月良浩、岡まゆみ、安田昌江、劉蘭個川、遠藤賢司、ユリヤ・ハハレヴァ、石川智、渡会尚子、榎原芳美)

デトロイト・ウインザー日米協会の協賛により実施されました。

## 2011年夏期映画シリーズ — 北野武

この夏、国際交流基金とCJSは、北野「ビート」武の特集シリーズとして4本の映画を上映しました。上映作品は、北野武がキャリアを通じて生み出しより多くの観衆が認めるようになってきた幅広いキャラクターの一部を披露しました。また、このシリーズは、ローチ・ホール・オーデトリウムでの上映の時代の終わりを告げました。秋期シリーズより、エンジェル・ホールの新たに改装されたオーデトリウムAに移動しました。



## アウトリーチ

*the yellowed leaves  
are the feelings of the tree  
falling away*

- コウジ



秋を迎え、再びCJSの夏期のアウトリーチ活動を振り返る時期となりました。CJSは、6月にはアン・アーバー・ブック・フェスティバルの子供向けイベント「Show Me a Story (お話をを見せて)」に参加し、子供たちの漫画キャラクターの作成を手助けしました。子供たちは、テンプレートとイメージを用いて各自のキャラクターを作成し、二次元の画像を後に三次元の作品に転換しました。7月には、CJSは中国研究センターならびにナム・コリア研究センターと共に「Top of the Park (トップ・オブ・ザ・パーク)」に参加し、「キッド・ゾーン」のために一連の図画工作活動のコーディネーションを行いました。最近の修士課程卒業生エミリー・カノサと兄のエリック・カノサ、CJSの学生アシスタントの福岡真一のサポートを受け、子供たちと並んで親たちもミニチュア鯉のぼりを制作し、ひらがなの書き方を習いました。家族たちはその後、ヤン・スチュワートによる日本の紙芝居に熱心に聞き入りました。

夏の終わりには、CJSは、「食べ物・自然・社会」と名づけた新しいジャパン・キットを発表しました。このプロジェクトは、最近の修士課程卒業生ジョシュア・シュラケット、CJSの元学生アシスタントで最近の卒業生のコリン・ウィルソン、および前述の福岡真一の努力により、2010年秋期の初めに開始されました。今回のキットには、理解しやすいプレゼンテーションとアクティビティ、文化的アイテム、資料が含まれ、教師が日本の地理、社会、および言語を生徒に楽しく紹介できる方法を提供しています。

2011年度CJS写真コンテスト「コミュニティの(再)定義」については、数々の研究、勉学、観光を目的とした日本訪問の成果としての多数の写真がCJSに寄せられています。このコンテストの目標は、日本では何が「コミュニティ」を成り立たせているかについての様々な解釈をいっせいに提示することにあります。提出された写真とキャプションは、過去のコンテストと同様に、一般の人々が閲覧でき教師が教室での活動に活用できるようにCJSのウェブサイトに永続的に掲載されます。最終選考は10月上旬に行われました。

CJSのK-14アウトリーチのあらゆるイベントおよびプロジェクトの成功は、ボランティアと貢献者の皆さんのおかげによるところが大きいもので、この秋期にも関与していただける機会がさらに多くありますので、詳細情報につきましては、ヘザー・C・リトルフィールド(hclittle@umich.edu)までぜひご連絡ください。



# センター催し物

## 平岡洋子アン・アーバーを訪問

10月20日午後7時より、琵琶、琴、三味線、地唄の名人である平岡洋子による『平家物語』の演奏と講演がミシガン大学美術館のヘルムト・スターン・オーデトリウムで行われました。演奏キャリアが30年になる京都出身の平岡氏は、人間国宝の筑前琵琶奏者の山崎旭萃の門下生であった筑前琵琶光明寺流宗家の菅公香から五弦琵琶を習いました。平岡氏は、演奏に加え、エスペランザ・ラミゼズ＝クリステンセン教授のコース「日本文化の愛と死」にも参加しました。



平岡洋子

## 2011年秋期映画シリーズ

黒澤明監督の人気白黒作品を新しい35ミリフィルムで上映し大いに評判を博した昨年のシリーズに続き、2011年はカラーをテーマにしました。上映作品は、黒澤明監督のカラー作品ならびに他の監督によるカラーを描写

# 2011年秋季・2012年初冬季カレンダー

## 9月

16日 レセプション:メラニー・トレーデ CJS2011~2012年度トヨタ招聘客員教授(ハイデルベルグ大学東アジア美術史インスティテュート東アジア研究センター教授)の歓迎レセプション。午後3~5時、社会福祉学部ビル(School of Social Work Building)国際研究所ギャラリー。

30日 映画上映\*\*:'ハウルの動く城' 宮崎駿監督(2004年)。

## 10月

6日 ヌーン・レクチャー\*:「The Future of Regional Liquidity Arrangement in East Asia: Lessons from the Global Financial Crisis (チェン・マイ・イニシアティブの未来:グローバル金融危機からの教訓)」ウィリアム・グライムス(ボストン大学国際関係論・政治学教授)。

6日 ベニー・W・スタンプス・スピーカー・シリーズ:「Openess」。森万里子(アーティスト)。午後5時10分、ミシガン・シアター(所在地:603 E. Liberty street)。無料、一般公開。美術デザイン学部主催、CJS協賛。

7日 映画上映\*\*:'どですかでん' 黒澤明監督(1970年)。

14日 学会:「The Early Modern 'Medieval': Reconstructing Japanese Pasts (近代初期「中世」:日本の過去の再構築)」。キーノート・スピーカー:久留島典子(東京大学史料編纂所歴史学教授)、梅澤ふみ子(恵泉女学園大学歴史学教授)。詳細はCJS(umcjs@umich.edu)まで。CJS、日米友好基金、アジア学会北東アジア協議会、ミシガン大学(LSA、歴史学部、国際研究所、人文学研究所、OVPR、ラッカム大学院)協賛。

13日 ヌーン・レクチャー\*:「We Came to Deliver What You Have Forgotten: Studio Ghibli as Producer of Cultural Memory (忘れ物を届けにきました。文化的記憶の創造者としてのスタジオジブリ)」ラインハルト・ツェルナー(ボン大学日本学教授、CJS2003~2004年度トヨタ招聘客員教授)。

14日 映画上映\*\*:'千年女優' 今敏監督(2001年)。

20日 ヌーン・レクチャー\*:「Strategies of Camouflage: Suzuki Norio's Photographs of Onoda Hiroo (1974), and Tsukada Mamoru's Identical Twins Series (2003) (カモフラージュの戦略:鈴木紀夫の撮った小野田寛郎の写真(1974年)と塚田守の撮った「一卵性双生児」シリーズ(2003年))」アヤレット・ゾハー(ハイファ大学美術史・アジア学講師)。ミシガン大学歴史学部、チャールズ・ラング・フリーア基金、ミシガン大学美術館の協賛。

20日 レクチャー&リサイタル:「『平家物語』レクチャー&リサイタル」。平岡洋子(琵琶、琴、三味線、地唄の名人)。午後7時、ミシガン大学美術館ヘルムト・スターン・オーデトリウム(所在地:525 South State street)。無料、一般公開。

21日 映画上映\*\*:'乱' 黒澤明監督(1985年)。

22日 シンポジウム:「Barbarians, Monsters, Hybrids ad Mutants: Asian Inventions of Human 'Others' (野蛮人、怪物、ハイブリッド、突然変異体:アジアの「他の」人の発明)」。キーノート・スピーカー:アリ・ペーダード(カリフォルニア大学ロサンゼルス校比較文学部長)。午前9時~午後5時、ミシガン大学美術館ヘルムト・スターン・オーデトリウム

黒澤明監督『乱』(1985年)。秀虎役の仲代達也と狂阿弥役のピーター。写真提供:リアルト・ピクチャーズ。



的、美的、象徴的、あるいは歴史的な要領で特徴とした映画作品でした。

## 学会:近代初期「中世」:日本の過去の再構築

CJSは、10月7~9日にミシガン大学セントラル・キャンパスで開催された学会を主催しました。殿村ひとみ(歴史学・女性研究学教授)とピーター・シャピンスキー(イリノイ大学スプリングフィールド校歴史学助教授、ミシガン大学2005年歴史学博士号取得)が協力して日本から招いた2名のキーノート・スピーカーが、久留島典子氏(東京大学史料編纂所歴史学教授)は「Records of Distinguished Military Service: From Medieval to Early Modern Times (戦の殊勲記録:中世から近代初期まで)」、梅澤ふみ子氏(恵泉女学園大学歴史学教授)は「Images of a Medieval Warrior in Tokugawa Writings: Kumagai Naokane in Plays, Ballad-dramas, and Religious Tales (徳川家史料における中世武士のイメージ:能、浄瑠璃、仏教講話の中の熊谷直実)」と題して、それぞれ講演を行いました。さらに、12名のパネリストが4つのパネルディスカッションを行いました。この学会の詳細情報につきましては、ウェブサイト(<http://japanesepasts.lsa.umich.edu/>)をご覧ください。

(所在地:525 South State street)。詳細はウェブサイト(<http://www.lsa.umich.edu/histart/>)で、チャールズ・ラング・フリーア基金、ミシガン大学美術館協賛

27日 ヌーン・レクチャー\*:「Time and Space in Japanese Music (邦楽の時間と空間)」ウィリアム・マルム(ミシガン大学音楽民俗学名誉教授)。

28日 映画上映\*\*:'HOUSE ハウス'大林宣彦監督(1977年)。

## 11月

3日 ヌーン・レクチャー\*:「Fukushima's Victories and Victims: The Fateful Alliance of Japanese Soccer and Nuclear Power (福島)の勝利と被害者たち:サッカーと原子力の破壊な関係」エリス・エドワーツ(バトラー大学人類学准教授)。

4日 映画上映\*\*:'嫌われ松子の一生' 中島哲也監督(2006年)。

10日 ヌーン・レクチャー\*:「From the Study to the Stage: Tōkaidō Yotsuya Kaidan, Performance and Text (書齋から舞台へ - テキストとパフォーマンスとしての『東海道四谷怪談』)」嶋崎聡子(コロラド大学ボルダー校日本文学助教授)。

11日 映画上映\*\*:'十三人の刺客' 三宅崇史監督(2010年)。

17日 ヌーン・レクチャー\*:「In and Out of the Body: Corporeal Visions and Ecstatic Perception in Wartime Japanese Training Documentaries (肉体の内と外:戦時日本の修練のドキュメンタリーにおける身体的幻覚と恍惚的知覚)」マイケル・レイン(映画学者)。

18日 映画上映\*\*:'実録・連合赤軍あさま山荘への道程' 若松孝二監督(2007年)。

## 12月

1日 ヌーン・レクチャー\*:「Figurality and the Development of Modern Consciousness (形象性と近代意識の発展)」チャールズ・シロウ・イノウエ(タフツ大学日本文学教授、国際文学ビジュアル研究共同ディレクター)。

8日 ヌーン・レクチャー\*:「PhotoVoice: Women's Experiences of the Great East Japan Earthquake (フォトボイス:東日本大震災の女性の経験)」吉浜美恵子(ミシガン大学社会福祉学部教授)。

## 1月

7日 特別イベント:CJS第8回年次餅つき:伝統の餅つき、試食、音楽生演奏、書道、折り紙、漫画、ゲーム、その他。午後1~4時、イースト・ホール・アトリウム(所在地:530 Church Street, Ann Arbor)。

\* ヌーン・レクチャーはすべて無料で一般に公開され、別途通知のない限り、正午から午後1時まで社会福祉学部ビル(SSWB)1636号室にて行われます。<http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/noonlectureseries>

\*\* 映画上映はすべて、英語字幕付きの日本語です。入場料無料で、エンジェル・ホールのオーデトリウムAにて午後7時に開始されます。<http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/filmseries>

# 教員研究助成金

## 2011～2012年度教員研究助成金発表

日本研究センターの2011～2012年度教員向け研究助成金の受賞者が決定しました。この助成金プログラムは、日本の様々な側面を調査する個人あるいは団体のプロジェクトに対して授与されます。本年度の受賞者およびプロジェクト内容は以下のとおりです。

**サラ・コンラス研究助教授**(社会調査研究所集団力学研究センター)には、本人のプロジェクト「The Adaptiveness of Emotional Disclosure in the United States and Japan(米国と日本における感情開示の適応性)」への資金援助が授与されました。ネガティブな出来事を経験した後、自分の感情を話したほうが良いのか? 研究によると、感情表出はポジティブな健康成果につながることで、逆に気持ちを話さないでいることは健康に有害であることが示唆されています。しかし、感情の開示の適応性に関する調査のほぼ全部は、個人主義的文化内(例えば、米国内)で実施されています。集団主義社会である日本の国内では、感情表出の健康効果は薄れる可能性があります。コンラス助教授は、最近の研究論文において、自己が他者とは別個の自立した存在とみなされる際の相互独立的な文化的自己観は、感情の認識と言語化の増加を予測し、そのことが心理的安寧に寄与し、その一方で、自己が他者と関係した存在とみなされる際の相互協調的な文化的自己観は感情の認識と言語化の減少を予測することを実証しました。しかし、この研究は米国人のみを対象に行われたものであり、したがって他のより集団主義的な文化において感情の開示が同一の効果をもつとは想定され得ません。今回のCJSの資金援助を受けたプロジェクトは、個人主義的文化(米国)と集団主義的文化(日本)の双方において相互独立的な文化的自己観と相互協調的な文化

的的自己観を始動させる素因を用いることにより、二つの問題、すなわち(1) ネガティブな出来事に関する感情の開示は米国と同様に日本においても適応されるか、および(2) 感情の開示の適応性は人々が自らを独立的とみなすか協調的とみなすかに依存するかについて、探求します。

**ジャージー・リアン教授**(公衆衛生学)には、本人のプロジェクト「Dimensions of Religion among Older Japanese(日本の高齢者の間の宗教の重要性)」への資金援助が授与されました。宗教に打ち込んでいる高齢者は宗教にそれほど熱心でない高齢者よりも身体的かつ精神的な健康を享受する傾向にあることが、大量の文献によって示唆されています。しかし、これらほぼすべての調査は、米国内のキリスト教徒に焦点を当てたものであり、他宗教の伝統を实践する高齢者の間の関連性については、家庭、寺院、神社で仏教と神教の儀式を行う日本の高齢者を含め、ほとんど何も知られていません。こうした伝統を探求することにより、宗教が健康に影響を与える共通の様相または文化的に独自の様相が判明します。今回の助成金は、日本における宗教の主な重要性の一部について予備的感触を把握することを目指したパイロットスタディーに用いられ、結果の情報は、リアン教授が後の米国および日本における宗教と健康に関する比較調査において解明することを期待する類の複合概念をより明確に識別するために利用されます。

**平野早秀子臨床講師**(家庭医学)には、本人のプロジェクト「Stress and Expectations of Japanese Pregnant Women in United States(米国内の日本人妊婦のストレスと期待)」への資金援助が授与されました。ミシガン大学日本家庭健康プログラム(JFHP)のミッションは、日本人に文化的かつ言語的な気配りをした医療を提供することです。妊娠は、人生の一大イベントであり、

多数の妊婦がある程度の苦悩を報告しています。米国で生活する日本人妊婦にとっては、このストレスはさらに複雑です。これまでに報告されているストレス源は、言語の障壁、家族や友人から遠く離れていること、異文化、出産に対する医療従事者の態度などです。このプロジェクトは、米国内の日本人妊婦のストレス源と期待を識別することを目的とし、JFHPがそれらにいかに対応しているかを評価します。

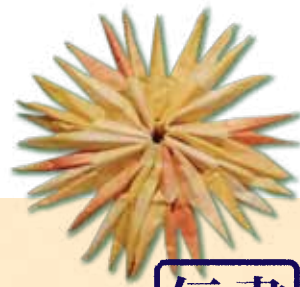
**エンディ・ポスコヴィッチ准教授**(美術・デザイン学部)には、本人のプロジェクト「Reinventing the Language of Mokuhanga on Grand Scale: Exploring Larger-Than-Life Mokuhanga Printmaking in Artist Studio and Classroom(大作による木版画の伝達体系の再発明:スタジオおよび教室での超特大の木版画の制作)」への資金援助が授与されました。ポスコヴィッチ准教授の版画によるグラフィックス作品は、過去16年間にわたり、日本の伝統的な木版画の手法と美的感覚を採り入れてきました。彼はとりわけ、教授法の観点において、浮世絵の画像の伝統的ならびに現代的なコンセプト、特に現代教育の前後関係において版木の「彫」と水性染料での「摺」の技術を調査してきましたが、このプロセスを通じて、現代の日本人木版画家が二つの基本的なこと、すなわち彼ら自身に合った絵画的スペースを創造することと彼らの個人的な視覚的言語を伝統的な方法を通じて拡張/定義することを同時に行う様子を、より密接に観察することができるようになりました。ポスコヴィッチ准教授は8年前に、カリフォルニア州バークレーのカラ・アート・インスティテュートのアーティスト・イン・レジデンスとして、複数の版木を用いる多色摺り木版画である浮世絵様式の複雑な彫と摺のプロセスを大作で行う冒険的企てに初めて着手し、大規模な版画が印刷機械や現代技術を用いずに伝統的な木版画の手法を用いて実現可能

であるというアイデアには、大いに気持ちを引き立てられました。このCJSの助成金は、従来型の印刷スタジオに依存しない現代木版画の複数の版本による彫と摺の革新的なアプローチを吟味する現行プロジェクトの援助となります。さらに、この創作上の研究を拡張する目的において、水性染料を用いる現代日本人木版画アーティストの創作慣行に関する現場研究も実施する計画です。

**ジェニファー・ロバートソン教授**(人類学、美術史学)には、本人のプロジェクト「Robo-therapy in Japan: Robot Assistants in the Treatment of Cognitive Disorders in Children and Senior Citizens(日本におけるロボ・セラピーー: 子供および高齢者の認知障害の治療におけるロボット・アシスタント)」への資金援助が授与されました。日本ほどロボティクス分野が熱意をもって公に追求されている国は、他にありません。経済産業省(METI)は、日本のロボット産業およびそのスピノフは今世紀のグローバル・ロボット市場を最終的に独占する、と予測しています。日本のロボティクスおよびその大手企業(三菱、トヨタ、ホンダ、NECなど)は、子供そして特に増加の一途をたどる高齢者の世話をし、娯楽と話し相手を提供し、家事を手伝う高知能で自律したヒューマノイド・ロボットの設計、製造、販売において、外国およびその同業他社よりもはるかに先んじています。過去10年間にわたり、日本では、社会的でインタラクティブなロボットがロボット心理学および/またはロボセラピーと命名された新研究分野の第一の課題となっています。癒しサービス・ロボットやインタラクティブ感性刺激ロボットは、学習障害や認知障害(先天的か、加齢に関連するか、事故/疾病により引き起こされたかを問わず)の治療に非薬理的なアプローチを提供します。ロバートソン教授の助成金は、非薬理的アプローチのみに焦点を

当てた、人類学博士号候補生である照山絢子との協働研究の支援となります。

**殿村ひとみ教授**(歴史学・女性研究学)には、本人のプロジェクト「Medieval Masculinity in Early Modern Imagination: Idolizing and Packaging the Battling Man of Courage in Times of No War(近代初期の想像における中世的男らしさ: 戦争のない時代における戦う勇敢な男のアイドル化とパッケージ化)」への資金援助が授与されました。殿村教授のプロジェクトは、2011年10月にCJSが協賛する「近代初期『中世』: 日本の過去の再構築」に関するワークショップで発表する論文執筆のために実施される研究です。殿村教授がまとめ役を務めるこのワークショップは、近代初期日本(1600~1867年)における解釈の過程を幅広く探求します。暴力の遺産の上に構築された平和な社会に暮らすその時代の人々は、中世の過去に極度にアプローチしました。人々は、中世の用語や先例を流用し再解釈し、中世の情報源を創造的な方法で集積し編集し、前時代に関して膨大な文献、美術、工芸品を生み出しました。例えば、武家は、特に自らの祖先である中世の侍を勇敢な男性の模範として思い描きました。暴力は名誉あることであり、謀反でさえ新しい主君への忠誠の表れとして解釈し直されました。私たちにあって危険なことは、近代の文献が「中世」として識別しているものの多くは、その起源を近代初期に生み出された発明に負うものであることです。このワークショップの主題自体、そして特に殿村教授の論文は、同教授の大規模であり2冊の書籍に帰結する研究プロジェクト「前近代日本のジェンダーと軍隊」に直接関係するものです。CJSの助成金は、このワークショップの論文の執筆を援助しますが、この調査および執筆から得る資料および洞察は、かかる2冊の書籍のうち1冊を完成するというより大規模な目標の達成にも役立てられます。



#### ミシガン大学 日本研究センター

1080 S. University, Suite 4640  
Ann Arbor, MI 48109-1106  
電話: 734.764.6307  
ファクシミリ: 734.936.2948  
Eメール: [umcjs@umich.edu](mailto:umcjs@umich.edu)  
ウェブサイト: <http://www.i.umich.edu/cjs/>

所長: ジョナサン・ズウィッカー  
アドミニストレーター: 深澤ゆり  
プログラム・アソシエート: ジェーン・オザニッチ  
アウトリーチ・コーディネーター:

ヘザー・リトルフィールド  
学務コーディネーター: 高田あづみ  
オフィス・アシスタント:  
マーガレット・ラドバーク

#### ミシガン大学日本研究センター出版会 Center for Japanese Studies Publications Program University of Michigan

1007 East Huron  
Ann Arbor, MI 48104-1690  
電話: 734.647.8885  
ファクシミリ: 734.647.8886  
Eメール: [cjsspubs@umich.edu](mailto:cjsspubs@umich.edu)  
ウェブサイト:  
<http://www.cjsspubs.lsa.umich.edu/>

出版会ディレクター: 殿村ひとみ  
総編集長: ブルース・ウィロビー

CJS執行委員会: ジョナサン・ズウィッカー  
(職権上)、レスリー・ピンカス、岡まゆみ、  
吉浜美恵子

ミシガン大学理事: ジュリア・ドノバン・ダーロウ、ローレンス・B・ディーチ、デニス・イリッチ、オリビア・P・メイナード、アンドレア・フィッシャー・ニューマン、アンドリュー・C・リックナー、S・マーティン・テイラー、キャサリン・E・ホワイト、メアリー・スー・コールマン(職権上)

ミシガン大学は、人種、性別、肌の色、宗教、信条、国籍または出身国、年齢、婚姻状況、性的志向、心身障害、退役軍人地位に関わらず、あらゆる人物に関する差別禁止および機会平等の方針を確約します。ミシガン大学はさらに、差別禁止および差別撤廃に関する適用法をすべて遵守します。

伝書編集人: ジェーン・オザニッチ  
伝書デザイン: S2デザイン  
伝書翻訳: 村上まどか  
伝書制作: ゲーツクラフト・プリンターズ・インク



ミシガン大学日本研究センター  
Center for Japanese Studies  
The University of Michigan  
1080 S. University, Suite 4640  
Ann Arbor, MI 48109-1106

# 学

ミシガン大学  
国際研究所

日本研究センター

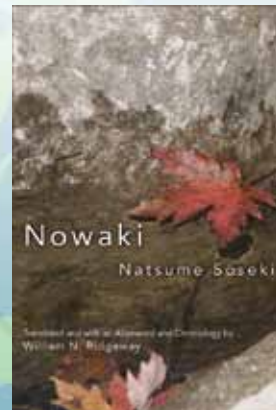
2011年 秋

CJS出版会の新しいウェブサイトでは  
オンライン注文ができます

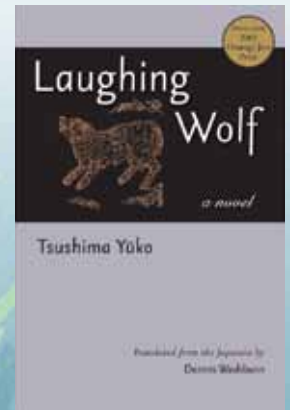
<http://www.cjspubs.lsa.umich.edu/>

『伝書』日本語版(英語版秋季号の翻訳)はこれが最終号となります。

『伝書』英語版を新たに購読ご希望の方は、[umcjs@umich.edu](mailto:umcjs@umich.edu)  
あるいは Center for Japanese Studies, University of Michigan,  
1080 S. University, Suite 4640, Ann Arbor, MI 48109-1106, U.S.A.  
へご連絡ください。購読は無料です。



『Nowaki(野分)』  
夏目漱石(Natsume Sōseki)  
ウィリアム・N・リッジウェイ  
(William N. Ridgeway) 翻訳・  
あとがき・年表



『Laughing Wolf(笑いオオカミ)』  
津島佑子(Tsushima Yūko)  
デニス・ウォッシュバーン  
(Dennis Washburn) 翻訳

日本研究センター  
出版会新刊書